

Stuttgart.

JOHNSON, D. F. 1934. Morphology and life history of *Colacium vesiculosum* Ehr. Arch. Protistenk. 83: 241-263.

神谷 平 1960. 淡水産コペポダに着生する一藻類. 藻類 8: 12-14.

LEMMERMANN, E. 1913. Eugleninae. In A. PASCHE (ed.), Die Süßwasserflora Deutschlands, Österreichs und der Schweiz. Heft 2. Flagellata. Gustav Fisher, Jena.

PRINGSHEIM, E. G. 1946. Pure Cultures of Algae. Cambridge Univ. Press, London.

ROSOWSKI, J. R. and HOSHAU, R. W. 1970. Staining algal pyrenoids with carmine after fixation in an acidified hypochlorite solution. Stain Tech. 45: 293-298.

ROSOWSKI, J. R. and KUGRENS, P. 1973. Observation on the euglenoid *Colacium* with special

reference to the formation and morphology of attachment material. J. Phycol. 9: 370-383.

ROSOWSKI, J. R. and WILLEY, R. L. 1975. *Colacium libellae* sp. nov. (Euglenophyceae), a photosynthetic inhabitant of the larval damselfly rectum. J. Phycol. 11: 310-315.

SKUJA, H. 1948. Taxonomie des Phytoplanktons einiger Seen in Uppland, Schweden. Symb. Bot. Upsal. 9(3): 1-399.

STARR, R. C. 1964. The culture collection of algae at Indiana University. Am. J. Bot. 51: 1013-1044.

STARR, R. C. 1978. The culture collection of algae at University of Texas at Austin. J. Phycol. 14: suppl., 47-100.

STEIN, F. R. 1878. Der Organismus der Infusiothiere III. Der Organismus der Flagellaten 1. Wilhelm Engelmann, Leipzig.

## 新刊紹介

Farr, E. R., Leussink, J. A. and Stafleu, F. A. (eds.): **Index Nominum Genericorum (Plantarum)**, Regnum Vegetabile Vols 100-102. xxvi+1896 pp. (in 3 vols). Bohn, Scheltema & Holkema, Utrecht. 1979. (価格約 94,000円).

植物の属名をすべて収録する計画が立案され、実行が開始されたのは、1954年パリで開催された国際植物学会議の際の決定によっている。このような仕事は少数の人によってできるものではなく、各専門分野にわたる多数の研究者の協力によらなければ不可能なことである。この事業に世界各国の110人以上の研究者が参加し、日本からは山田幸男先生も加わって、25年にわたる努力の末に *Index Nominum Genericorum (Plantarum)*, 略して ING の出版が完成した。最初はカード形式で発行が開始され、1,000枚を1組として1955年から1971年までに35セットが出版された。カード形式による発行はここまでで中断した。そして利用に便利にするために本の形式をとることとなり、1975年までに発表された植物の属名を網羅して、約1,900ページを3巻に分けて出版が完了した。本書には細菌を除くすべての現生および化石植物の属名約63,500を収録してあり、それぞれの属名について著者、発表された出版物、発表の日付を示し、タイプ種に関すること等の事項を加えてある。

このような完備した目録ができたことにより、属名の綴字や引用等を安定させることに役立ち、また今後無用のホモニムを作ったりする混乱を防ぐ意味でも、その有用性は極めて大きいものである。

この目録の藻類に関する部分を通覧してみると、科への配置には色々不備のあることもわかる。綴字上の問題点について、紅藻・褐藻・緑藻で、現在ふつうに使われている綴りと違うものがある。今後はこの目録で正しいとして採用されたものを使って行くべきであると考えられるので、気付いたものを以下に列記する。

慣用の綴り	目録の正しい綴り
<i>Audouinella</i>	<i>Auduinella</i>
<i>Chlamydomonas</i>	<i>Chlamidomonas</i> ただし科名 Chlamydomonadaceae
<i>Cymathere</i>	<i>Cymathaere</i>
<i>Griffithsia</i>	<i>Griffitsia</i>
<i>Hildenbrandia</i>	<i>Hildbrandtia</i> ただし科名 Hildenbrandiaceae
<i>Lithothamnion</i>	<i>Lithothamnium</i>
<i>Monospora</i>	<i>Monosporus</i>
<i>Nemastoma</i>	<i>Nemostoma</i>
<i>Peyssonnelia</i>	<i>Peyssonnelia</i>

(北大理植 吉田忠生)

音などの時の 梟=サワガシイ・ヤカマシイの意で“水中にあって音たててさわぐ水生の草”とする説もある。また澡が、掃除などの掃と同じく清メル・洗ウの意味を持つとして“水中で身を洗い清めている草”の解釈もなりたつ。こちづけみたいな説明になってしまったが、何にしても、生時、水中での体の動き・生き方などに視点をおく表形記号として良からう。そして、草と藻とをなぞ書き分けたかを推測するに、陸上の植物では“風雨の際でもそれに抗して毅然と屹立し続け得る堅固な体型・生き様”であるのに対して、水生の植物では“水の動きにつれてゆれ動くナヨナヨした柔軟・繊細な体型・生き様”で、両者が区別されるべき物であるとして、古代の人達も直観的に識別していたのではなからうか？それはとに角、海藻 seaweed, marine algae とする場合は“藻体それ自身が主格であって我々人間は外側からその生き方の理を客観的に追求しよう”との取り組み態度なのに対し、海

菜 seavegetable とする場合には“我々人間が主格であって、人間の生きて行くのに藻体をどう役立てるか、ただ食物とするだけでなく身心の全面的成長のためには…?”との取り組み態度、とでもいうような基盤的相違が両者の間には内在する。その違いには気付かず、海藻利用を殆んど無視していた西欧では seaweed なる用語だけがだったので、できるだけ速く西欧の科学的先進さに追いつこうとした明治時代の岡村・遠藤・官部などの大先達は、有用藻譜の存在はご存知だったけれども、その中にある海藻なる用語の真意義を見逃がされたのではなからうか、と推測する。そんな態度がその後も長く後継者達（私自身も含めて）の間にも残り、日本で造語して然るべき seavegetable を西欧人に先取りされたのは、何といっても悔まれることと思う。一方では、旧習にとらわれぬ欧米人の発想の柔軟さに感服している。

(175 東京都板橋区徳丸 3-33-5)

### 新 刊 案 内

T. J. Conomos (ed): **San Francisco Bay: The Urbanized Estuary.** (T. J. コノモス編: サンフランシスコ湾: 都市化した入江) 493 pp. (1979). Pacific Division, American Association for the Advancement of Science, San Francisco, California. (邦貨にして約5,500円).

1846年のゴールドラッシュの時代以来、多くの人々が移住して住みつくようになったサンフランシスコ湾の周辺には現在約500万人が生活している。多くの他の地域と同様に、打ち寄せる都市化の波とともに、この湾にも汚染が進み、失われた生物は多いという。サンフランシスコ湾の汚染対策や自然保護をどのようにしたらよいかの基礎的なそして総合的な知識を得るために、アメリカ湖沼・海洋学会 (The American Society of Limnology and Oceanography) は1977年に、生物学者、化学者、物理学者、地質学者を招いてサンフランシスコ湾に関するシンポジウムを5日間に亘って開催した。この本はその時の研究発表を中心に、さらに関係の深い研究論文を加え、当初の約倍量の内容として出版されたものである。

内容の前半は緒言、歴史的展望等に続き、湾の地質、堆積物、海流 および 海水の化学成分等を扱う章が主体であるが、後半は生物関係の章で占められ、例えば、植物プランクトンの生態、クロロフィル量の変化、海藻相、沼沢地の植生、エビ類の分布、底生生物群集、帰化無脊椎動物、湾の魚類の過去・現在・未来、移入バス (Striped Bass) の生活史と現存量、カニ類の生産などの章がある。植物プランクトンの生態は J. E. Cloern, プランクトンクロロフィル量の分布と年変化は M. D. Ball & J. F. Arthur, そして海藻相は P. C. Silva により執筆される。海藻相を論じた Silva 博士の章は59頁に及び、ここでは、サンフランシスコ湾で生育が確認された種や変種の合計156が記載され、さらに、湾口より漸次湾奥に向って分けられた5地帯のそれぞれに生育する代表種の分布の比較等が行われる。Silva 博士の研究結果によると、湾の海藻相は予想と違って豊富でかつ多様性に富み、数地点を除いて生育は健全であったという。

この本の研究歴史の章を読むと、サンフランシスコ湾の研究が意外に少く、特に自然科学の立場からの総合的な研究が殆ど行われなかったことがわかる。それゆえに、この本が自然科学者やサンフランシスコ湾の行政に携わる人々に与える役割の大きいことが容易に想像される。この本は、太平洋を挟むわが国の対岸について話を扱っているが、翻ってわが国ではどうであろうか。世界でも有数の都市化と汚染に悩まされる東京湾について、少くとも海藻や植物プランクトンを含むこのような総合的なシンポジウムが行われ、そしてそのままの本が出版されたことを私は知らない。この本はそうした分野の研究プロジェクトを進める際の一つの指針になると思われる。下記に直接申込んで購入することもできる (価格約18ドル)。The California Academy of Science, Golden Gate Park, San Francisco 94118, California, U. S. A. (千原光雄)